

研究機関：広島大学

研究課題名	当院における肝移植後胆管狭窄に対する内視鏡的治療に関する検討
研究責任者名	広島大学大学院医歯薬保健学研究院消化器・代謝内科学 教授 茶山一彰
研究期間	2017年5月15日 ～ 2018年3月31日
対象者	2000年1月から2016年2月の間に、広島大学病院消化器代謝内科にて逆行性胆管膵管造影検査による治療を受けられた患者さん。
意義・目的	本邦において生体部分肝移植は進行性の肝不全や肝癌の治療において重要な治療手段として定着しつつあります。肝移植の胆道再建法には胆管胆管吻合と胆管空腸吻合がありますが、胆汁の流れが生理的であること、乳頭機能が温存されるため逆行性感染を防止できること、手技の簡便さなどから成人例においては前者の胆管胆管吻合が第一選択になっています。胆管胆管吻合後の胆道合併症として、最も多いものとして胆管狭窄が報告されています。胆管狭窄は急性胆管炎、閉塞性黄疸を惹起し、肝機能不全を来す可能性があり、そのマネージメントは重要です。本研究では当院における胆管胆管吻合による生体肝移植後の胆管狭窄に対する内視鏡的治療の成績およびその治療戦略について検討しています。
方法	<p>本研究は、診療録（カルテ）情報を調査して行います。</p> <p>カルテから使用する内容は年齢、身長、体重、性別、既往歴、生活歴（飲酒、喫煙）、肝移植の適応理由、生体肝移植した日付、胆管狭窄を認めた日付、内視鏡治療を行った日付、肝移植のドナーの続柄、グラフト肝の情報（左右、重量）、肝移植後の合併症の有無（肝膿瘍、胆汁漏、肝内結石）狭窄長（CTおよび内視鏡的逆行性胆管造影にて測定）、生存確認、生存および死亡確認日、狭窄部位に留置したステントの種類（通常型ステントまたは胆管内埋没型ステント）、ステント留置による狭窄改善の有無、ステント留置後の偶発症について、ステント留置後から急性胆管炎、閉塞性黄疸が起きるまでの日数、血液検査（白血球、CRP、T-bilなど）、画像検査（CT、MRI/MRCP、ERCP画像など）です。</p> <p>（個人を特定可能な情報は解析に用いません）</p>
共同研究機関	共同研究機関はありません。
個人情報の保護について	<p>調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。</p> <p>研究に資料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。</p>
問合せ・苦情等の窓口	<p>〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3</p> <p>Tel: 082-257-5193</p> <p>広島大学病院 消化器・代謝内科 職名 クリニカルスタッフ 清水晃典</p>